

# 舟宿水楼 - 柳橋における船宿の構法を応用した舟運一体型ホテルの設計 -

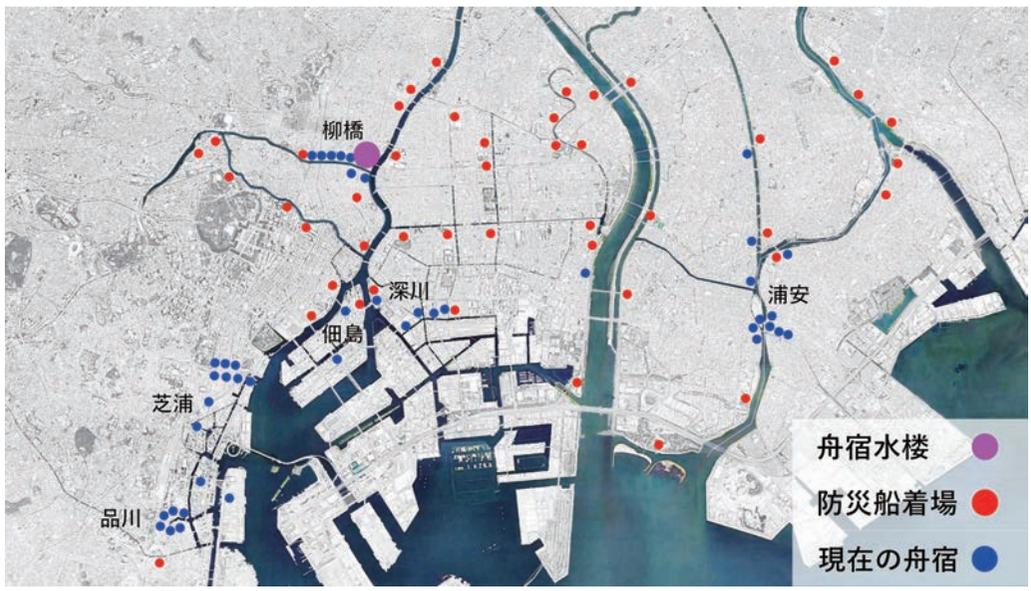
早稲田大学 建築学専攻  
吉村靖孝研究室



<計画概要> 神田川と隅田川が合流する位置に柳橋という場所がある。かつての柳橋にあった料亭街では、隅田川を眺めながら料亭遊びや舟遊びが行われており、料亭と舟宿が連携して豊かな水文化を形成していた。しかし、鉛直堤防の建設を境に料亭街はマンション街へと姿を変えた。舟宿はバブル期に流行した屋形船の運営を今でも続けているが、大人数貸し切りの娯楽スタイルは需要が低下し続けており、柳橋の水文化の消滅が危惧される。そこで、堤防によって分断された陸域と水域を再び結び付ける手法を探るため、柳橋の堤防沿いに残る舟宿を調査した。舟宿の歴史の変遷を整理し、現在の舟宿を観察して3つの舟宿構法を抽出した。そして、舟宿構法を応用して、最後の料亭亀清楼が入る水辺のマンションの半分をホテルへ改修した「舟宿水楼」と、料亭を機能分化・小舟群化して集合分散可能にした「料艇街」を設計した。舟宿水楼の積層する川床と、料艇街の連なる甲板は地域に開放されており、ホテルのオフシーズンでも水辺に賑わいを生む。舟宿水楼は、料艇街による柔軟な舟運のネットワークによって東京中の防災船着き場や既存の船宿、屋形船と結びつけられる。それによって土木・建築・舟運が一体となって陸域と水域を縫合し、新旧の水文化が混在する、都市の豊かな水辺の景観をつくる。



# 背景 1. 東京に点在する新旧の船着き場



東京はかつて水の都だった。河川舟運が発達し、舟のレンタルを産業とする舟宿が至る所にあった。現在残る舟宿の位置は、かつての漁師町や花街と重なっている。なかでも柳橋は、隅田川と神田川の交点に位置することから、一大花街が形成されていた。舟宿は古くからある船着き場として、屋形船や釣り船の発着所になっている一方、現在整備が進む防災船着き場は平時の利活用が進んでいないのが現状である。災害時に舟運を活用して迅速に物資や避難者を運ぶためには、平時に防災船着き場を活用して市民への認知を上げ、舟運のネットワークをあらかじめ作っておくことが求められる。さらに、舟宿と防災船着き場を結びつける舟運があれば、新旧の船着き場が有機的につながり、都市の歴史が河川沿いに蓄積していくことができる。

# 背景 2. 柳橋における水文化の衰退

## 江戸～昭和期の柳橋



かつて豊かな水文化を持っていた街の一つに柳橋がある。神田川と隅田川が合流する位置にあり舟運の便が良いことから、水辺には船の貸し出しを産業とする舟宿と、料亭が軒を連ねる料亭街があった。料亭街では、隅田川の涼しい風と眺望を取り入れながら料亭遊びや舟遊びが行われており、料亭と舟宿が連携して豊かな水文化を形成していた。

## 現在の柳橋



しかし、高度経済成長期の水質汚染と鉛直堤防の建設によって陸域と水域は分断され、水辺との関係を断たれた料亭街は角地の亀清楼を残して消滅しました。舟宿は屋形船の営業を続けていますが、大人数貸し切りの娯楽スタイルは時代と共に需要が低下し続けています。そこで私は、かつて柳橋にあった豊かな水文化を、鉛直堤防に覆われた、亀清楼が二階に入るマンションの水辺に復活させることはできないかと考えました。

# 調査 1. 舟宿の変遷



時代	柳橋年表
江戸	1456年 太田道灌による、平川(旧神田川)の流路変更。現日本橋川の流路が完成。 1620年 神田山の切り通し完成。現日本橋川を神田川から切り離す。 1698年 樽屋蔵右衛門により木橋が架橋される。当時の名称は「川口出口之橋」 1733年 兩國川開き花火大会 開始 1798年 万八楼で席画会の開催。江戸に書画会が広がる。 1817年 14名の芸妓が文書に記載 1842年 水野忠邦による改革で深川などの岡場所から逃れてきた芸妓が柳橋に移住 1848-54 料理茶屋番付に「万八」「亀清」の名が記載 1853-68 芸妓100、船宿30と記載『角川日本地名大事 1 3 東京都』 1854年 亀清楼が万八楼跡地に移動 1859年 芸妓140名から150名に増加 1860年 成島柳北「柳橋新誌」初編 1848-70 柳橋が洋式木造桁橋にかけ替え・護岸の改修
明治	1871年 成島柳北「柳橋新誌」二編 1876年 成島柳北「柳橋新誌」三編 1881年 神田松枝町の大火 1887年 柳橋が鋼鉄製桁橋にかけ替え・護岸の改修 1910年 明治43年の大水害
大正	1919年 都市計画法・市街地建築物法の施行 1923年 関東大震災、柳橋の崩落 1927年 船宿小松屋が柳橋に移る。既に船宿は沢山あった。 1928年 芸妓366名、料理屋、待合あわせて62軒 1929年 復興事業として上野アーチ橋を架橋・護岸の改修
昭和	1945年 東京大空襲 1946年 臨時建築制限令、通称「バラック令」の施行 1950年 建築基準法の施行、バラック街の撤去開始 1952年 料亭57軒 1953年 小松屋が佃煮を売り始める 1955年 高度経済成長期による水質悪化(一1972)、料亭と舟宿が営業中止し始める 1962年 兩國の川開きが中止、柳橋の衰退がはじまる 1965年 河川敷地占有許可条例を発出(河川区域内の土地占有に関して管理者の許可が必要) 1970年代神田川全域の直立護岸工事 1975年 隅田川護岸工事完了 1977年 水質の改善により船宿小松屋が再開、旅客不定期航路事業者として認可を受ける 1978年 隅田川花火大会が開始、屋形船の再流行、大型化 1978年 柳橋パーサイドマンション建設
平成	1991年 バブル経済崩壊

堤防によって分断された陸域と水域を再び結びつける手法を探るため、柳橋の堤防沿いに残る舟宿を調査した。柳橋の舟宿は鉛直堤防をまたぐように掛かる家型の桟橋で、一階に作業場兼倉庫、二階に事務所の部屋がある。既得権によって行政に存在を許された、建築と桟橋の融合体である。この桟橋は、江戸時代には簡易的な桟橋だったものが護岸整備とともに高床になって階段がつき、戦後のバラック街が形成された時期に、家型になったものである。鉛直堤防の建設や、バブル期の船の大型化に対応して増築し、現在の形に至る。

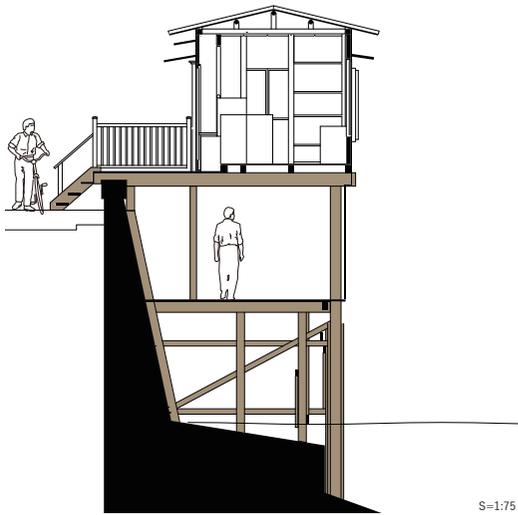
# 調査 2. 現在の舟宿の観察



柳橋に残る9軒の舟宿のうち、許可をいただけた3軒の室内外を測定、観察し、ほかの舟宿は外観的な特徴を記録した。その結果、一般的な建築とは異なる様々な特徴を収集した。以上の変遷と観察調査から、水際の建築の設計に活用可能な舟宿の構法を3つ抽出した。

## 舟宿構法の応用①

舟宿 断面図

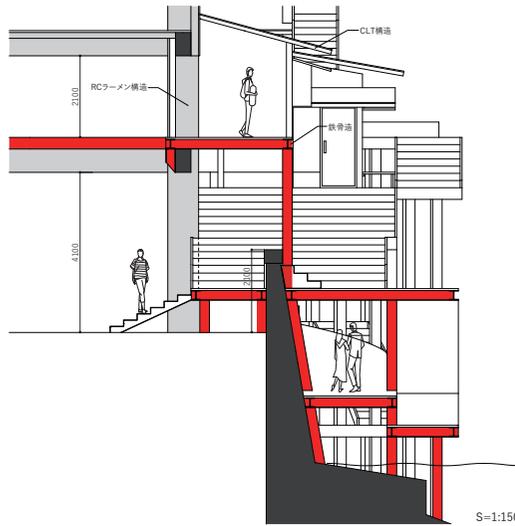


舟宿構法① 堤防の強い構造に木造の弱い構造を噛み合わせる

S=1:75

舟宿構法の一つ目は、木造の弱い構造を堤防の強い構造にかみ合わせる構法である。例えば、梁は堤防の上端に引っ掛けてあり、柱は護岸の形に添うように配されている。これによって堤防の治水機能、土地の歴史を損なうことなく構造的な強度を得ている。

舟宿水楼 断面図



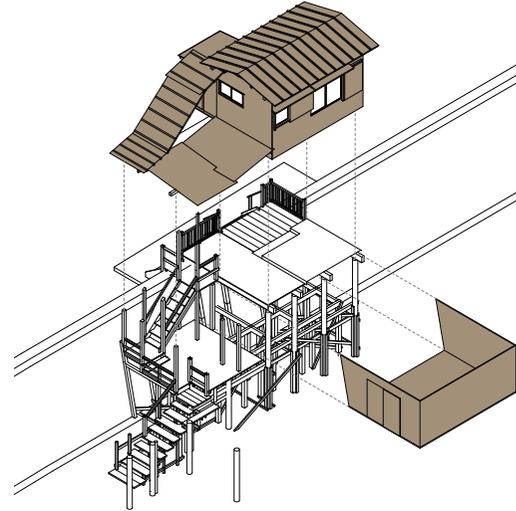
応用① ラーメン構造と鉛直堤防の構造に鉄骨造を噛み合わせる

S=1:150

この構法を応用して、既存マンションのラーメン構造と鉛直堤防にかみ合うように、鉄骨造の構造体を配置した。ラーメン構造の梁の上に鉄骨の梁を載せ、鉄骨部材でRC梁に固定している。

## 舟宿構法の応用②

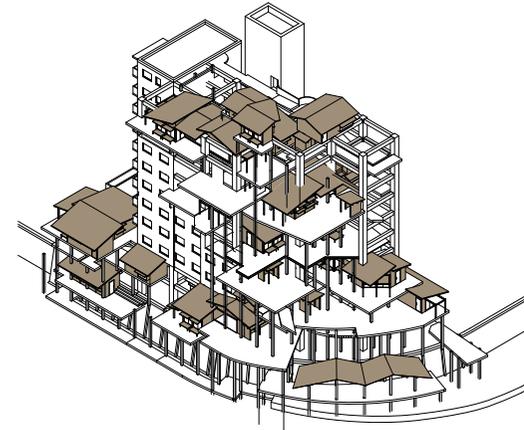
舟宿 アクソメ図



舟宿構法②川床を支える木造の構造に、後から屋根と壁をつける

舟宿構法の二つ目は、歩道・堤防・水面の高低差をつなぐ核構としての構造部分を先行してつくり、その構造を利用して後から壁と屋根をつけるという構法である。これによって、船宿は非構造部分の増改築を容易に行えるようになっている。

舟宿水楼 アクソメ図

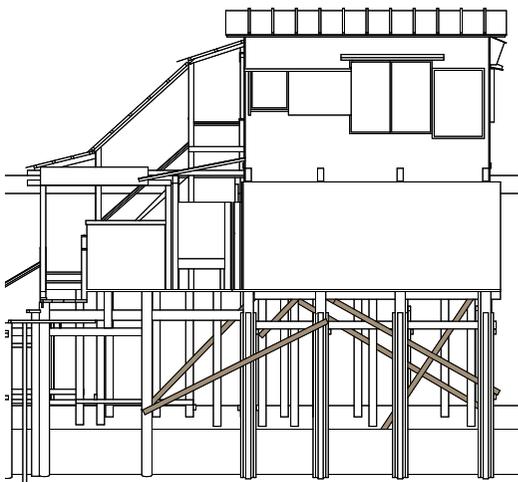


応用② 川床を支える鉄骨造の構造に、後から屋根と壁をつける

この構法を応用して、まず十階建てのマンションの頂上から水面までの高低差をつなぐ核構としての構造体をつくり、それを利用してあとからホテルの客室を付加した。客室は、オフシーズンに部屋をつなげてシェアキッチンやオフィスとしても使うことができ、地域のニーズに合わせた増改築が容易に行える。

## 舟宿構法の応用③

舟宿 立面図



舟宿構法③ 増改築の時には場当たり的に小さいブレース材を付け足す

S=1:75

舟宿構法の三つ目は、メンテナンスや増改築のために場当たり的に小さい部材をつけ足す構法である。部材を細分化することでメンテナンスが容易になり、また床の拡張にも対応できる。

舟宿水楼 立面図



応用③ ブレース材を兼ねた階段を客室に合わせて分散配置する

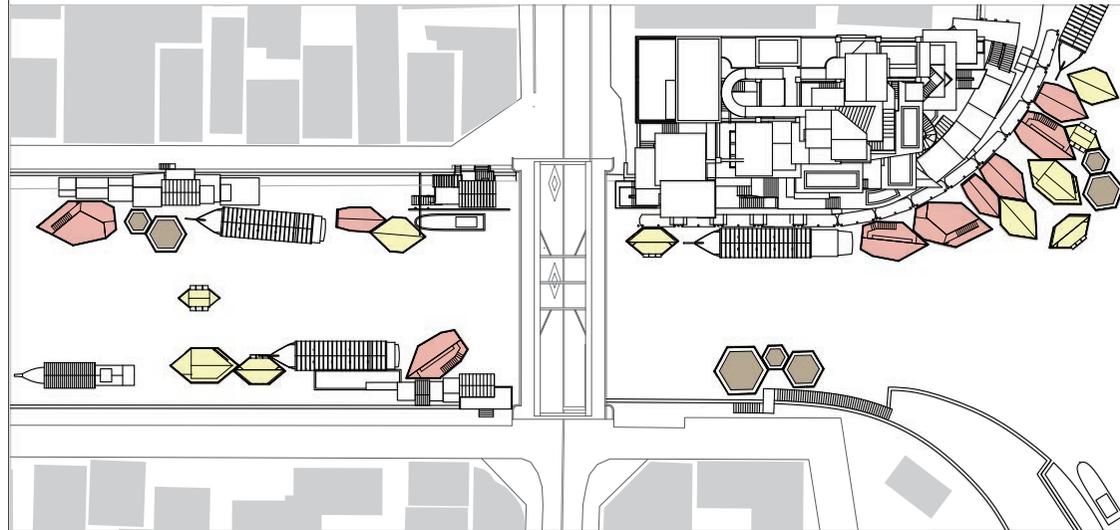
S=1:500

この構法を応用して、ブレースを兼ねた小さい階段を分散して配置した。これによって、増改築に対応しやすいだけでなく、縦動線に動きを加え、隅田川に対する多様な視点場を獲得できる。

## 料亭街から料艇街へ

料亭や屋形船が、厨房と個室を大きな箱に閉じ込めているのに対して、調理と食事の場所を細分化・小舟化した料艇街を提案する。料亭街は、料理をする厨船と、食事・観光する旅船に加えて、栽培ができる庭船で構成されている。料艇街でた生ごみは堆肥化して、川床にある畑や庭船の土に混ぜて循環させる。平面形状を多角形にして角度を揃えることで、ホテルのオンシーズンに集合し、オフシーズンに分散が可能である。また、高潮時には神田川の安全な場所に避難する。将来的に、既存の屋形船は、広い座敷を生かして図書スペースやギャラリー、カフェなどに改修し、料艇街と混在していく。

配置図 S=1:2000

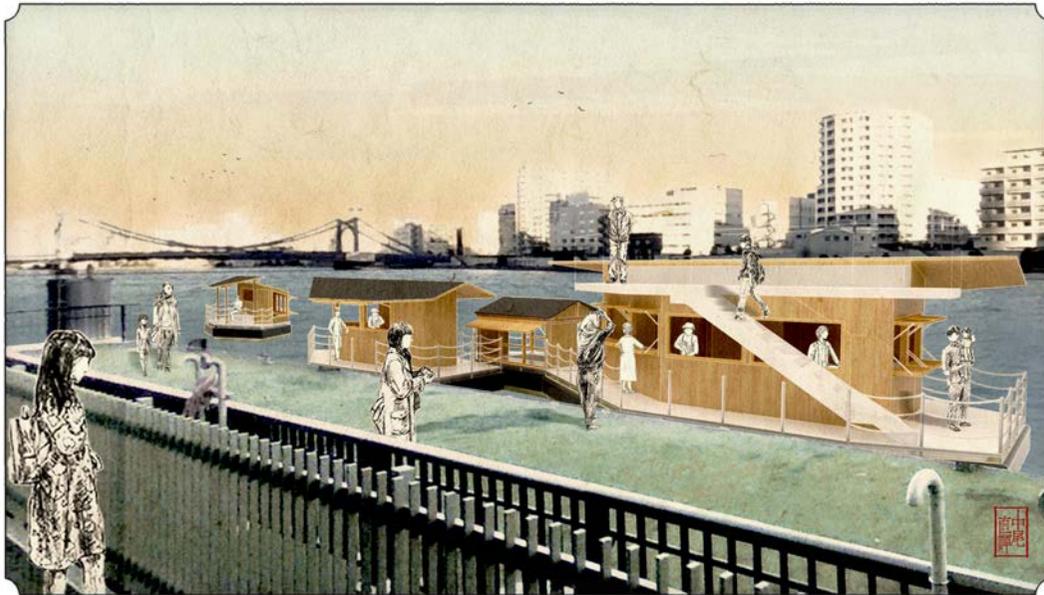




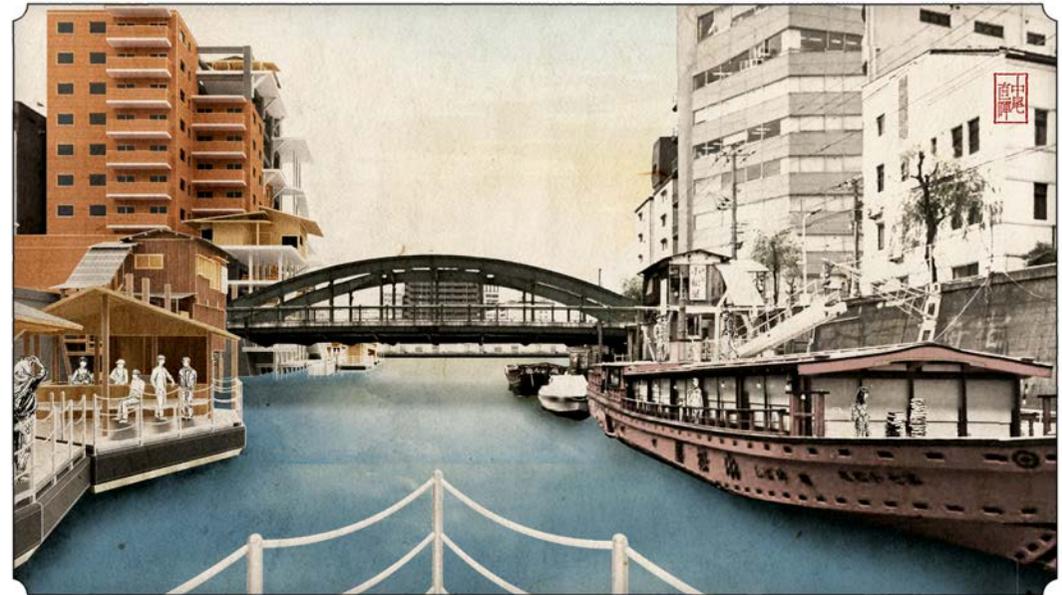
川床が階段でつながる。客室に加えてシェアキッチンやオフィスも混在しているため、地域に開かれた川床はホテルのオフシーズンでも賑わっている。様々な向き・形状の階段は隅田川への多様な視点場になる。客室と舟の壁には扉戸があり、開閉が可能になっている。これは、江戸時代の水際の料亭のように、水辺の涼しい風を室内に取り込み、自然喚起を行うためである。また、室内外の交流を生む装置でもある。



料館街は、ホテルのオンシーズンは柳橋に集合し、宿泊客と地域住民が水上で食事を楽しむ。厨舟で買った料理を、旅舟でつづぎながら食べる。



宿泊客は旅船で隅田川を移動し、現在整備が進む防災船着き場を活用して、東京を観光をすることができる。オフシーズンには、旅船は水上タクシーとして地域のインフラとなり、厨舟は移動販売を行う。舟運のネットワークを構築しておくことで、災害時の舟運の活用が容易になる。



舟宿水楼と舟宿、料館街と屋形船が混在する。かつての水文化に学び活用しつつ、現代の舟運で新旧の船着き場を結びつけていくことで、新旧の水文化が混ざり合う、都市の豊かな水辺の風景をつくる。